

デジタルコンテンツを用いたフランス語教育

—豊かな学びを目指して—

小松 祐子

KOMATSU Sachiko
Université de Tsukuba
komatsu.sachiko.gt@u.tsukuba.ac.jp

今日私たちは様々なデジタルコンテンツに囲まれ、これらを活用して日々を過ごしている。フランス語学習にあたってはその活用を考慮に入れることはもはや必然であり、デジタルリテラシーは学習者が社会的アクターとして言語を使用するための欠かせない要素の一つとなりつつある。私たち教育者にも、新たなコンテンツ活用を視野に入れた教育実践を考えることが、今後ますます求められるだろう。そこで今回考えたいのは、デジタルコンテンツをフランス語教育に活用するとはどういうことか、これらコンテンツはフランス語の学びを豊かにするかということである。

1. デジタル教材とは何か

はじめにデジタル教材とは何かを確認しておきたい。山中 (2010, p.1) によればデジタル教材とは「教育目標の実現のためにデジタル化された学習素材と学習過程を管理する情報システムを統合したもの」であり、デジタル教材 50 年の系譜は以下の3段階に要約できる (山中; 2010, p.3-4)。

- 1) 1975-1985 年 : CAI (Computer assisted instruction : コンピュータにより支援された教授活動) の時代 (背景に行動主義の学習観) : コンピュータが質問を出し、学習者の応答の正誤に応じて適切なフィードバックを行う→学習者の個人差に対応する方法として注目、しかし構造的に記述できる問題しか取り扱えないためその後下火となった。
- 2) 1985-1995 年 : マルチメディア教材の時代 (背景に認知主義の学習観) : PC の性能向上、画像・音声・映像が取り扱えるように。学習者が関心に応じて教材データベースにアクセスしながら学習を進める→新しい学習スタイルとして注目されたが、学習方略を持たない学習者は十分に使いこなせないことから限られた利用にとどまった。
- 3) 1995-2005 年 : CSCL (Computer supported collaborative learning : コンピュータ支援による協調学習) の時代 (背景に社会構成主義の学習観) : 学習者のテキストベースによる議論活動 (チャット)、ブログ、SNS→思考や対話の過程に介入することが容易であり、ネットワーク技術の教育利用として注目されたが、議論のテーマ設定や学習者のグルーピングに関するノウハウがないと学習が成功しないという課題も明らかになった。

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2014

デジタル教材と言え、まず 2) のマルチメディア教材を思い浮かべることが多いかもしれないが、学習素材だけでなくネットワーク技術を生かした協調学習までもが、その範囲に含まれることをここで注意しておきたい。

またデジタルコンテンツについては、「どのような」コンテンツがあるか、その質や種類について注目が集まりがちである。しかしフランス語教師の立場からは、「いかに」それらを使いこなすかが、当然ながら重要となる。コンテンツを利用する媒体・形態にしても、CALL 教室、普通教室でのプロジェクターを利用した授業、自学自習での利用、さらにはタブレット端末での利用など、さまざまな形態が考えられる。学習者とコンテンツとのかかわり方も、情報の一方的な受信から、SNS などのコミュニティへの参加、学習者自らコンテンツを制作する創造的な活動に至るまで多彩な活動が可能である。

2. デジタル教材の魅力と限界

デジタル教材は、時間・場所に制約されない学習（自学自習に最適）、マルチメディア素材、リソースの豊富さ・多様性、操作性、双方向性、コミュニケーション機能、学習管理機能などのさまざまな利点を持つ。

では、デジタル教材を用いればすぐに豊かな学びが可能になるかと言えば、事はそう単純ではない。小松は 2013 年 3 月の RPK アトリエでフランス語学習・教育に活用できるタブレット教材の比較検討を行ったうえで、教材だけでは豊かな学びに至ることはできないことを示し、以下のように結論づけた。「今後はこれらの端末の高い携帯性・操作性を生かし、教室でどのような授業活動を展開できるかを検討することが重要となるだろう。ドリル的なものを個人学習で行っているだけでは、「教育を変える」とは言えないのではないか。便利な道具を使って、いかに創造的な学習活動、協同学習活動を生み出していくかは、教師の創意工夫、力量にかかっているのである¹。」

これに関して、先に引用した山中編『デジタル教材の教育学』のなかで、「第 4 章 第 2 言語習得での活用」を執筆した山田は以下のように述べている。「設定する学習目標と学習科学などの関連諸分野に依拠した第 2 言語学習理論に基づいてデジタル教材は使用されるべきである²。」一方で、畑佐は『第二言語習得研究と言語学習』「第 5 部 テクノロジーと習得 総論」のなかで、以下のように述べている。「第二言語学習においては、はじめにテクノロジーありきではなく、第二言語習得理論に基づいて、テクノロジーの利用を考えるべきだという立場は筋が通っているが、実社会では新しいテクノロジーの波は第二言語習得理論とは無関係にやってくる。従って、我々は新しいテクノロジーの有効な利用方法を模索していく立場に立たされる。現場の教師たちも、新しいテクノロジーを使って授業をより効果的かつ効率的、そしてより魅力的なものにする方法を考えだそうと努力する³。」

¹ 小松祐子、「タブレット端末がフランス語教育に与える可能性」、『関西フランス語教育研究会論文集 RENCONTRES』第 27 号, 2013, p. 102.

² 山田政寛、『デジタル教材の教育学』(山中祐平編), 第 4 章「第 2 言語習得での活用」, 東京大学出版会, 2010, p. 75.

³ 畑佐一味、『第二言語習得研究と言語学習』(畑佐一味他編著), 「第 5 部 テクノロジーと習得 総論」, くろしお出版, 2012, p. 264.

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2014

このように、デジタル教材の活用は、学習理論に基づき設計されることが望まれるが、実際には現場教員の試行錯誤によって進められているのが現状であると言える。理論と実践とはどちらが先と一概に言えるものではなく、実践によって効果的な方法が示され実証されるものでもある。私たちはこのことを自覚して理論を視野に収めつつ、活用を進めることが大切であろう。

3. Lang-8 を使った授業

新しいテクノロジーを使って効果的な授業を行う試みの一つとして、筑波大学外国語センター開設科目「フランス語上級」2011年度の授業例を紹介したい。この授業では、1学期間にわたり、Lang-8 (<http://lang-8.com/>) という外国語学習者向け SNS を用いた。これは、2007年8月からランゲート株式会社が提供している無料サービスで、ユーザー同士が母語を教え合う作文相互添削の学びの場である。サイト上にフランス語で作文を書き込むとネイティブの参加者が添削してくれる、また自分も日本語学習者の作文を添削してあげる、という交換によって成り立っている。

実際にフランス語の作文を投稿してみると、30分以内に添削がつくことがほとんどである。時には複数のネイティブユーザーが添削をしてくれる場合もある。ただし、ネイティブの添削が必ずしも正しいフランス語でない場合もあり、またなぜ添削されたのかが学習者にはわからないということもしばしば起こることである。SNS のメッセージ機能を用いて、添削者とコミュニケーションすることも可能である。

「フランス語上級」のクラスはフランス語歴2年以上(3~4年生)を対象とする全学向けの授業であるが、受講者はごく少数である。毎回の授業前に受講者は各自が Lang-8 に作文を投稿し、添削してもらったものを授業に持ち寄り、クラスメートへ結果を紹介、学生同士で話し合いながら疑問の解決を目指す。その後教師がコメントとまとめを行う。この授業では、予習を前提とした学習者の主体的取組みによる活動が中心となる。最近注目される「反転授業」の一種であるとも言えるだろう。学習者にはネイティブに見てもらおうという満足感が得られ、教室内に留まらない開かれた学び、他の学習者と学びの共有が可能となる。

小松は2011年3月の RPK アトリエで、ソーシャルメディアと外国語学習について検討を行ったが、その結果、ソーシャルメディアによって以下のような効果的な学習が得られることを示した⁴。a) 学習者中心の学習、b) 行動中心の学習、c) 協調学習、d) 社会構成主義の学習である。ここでは紙面の都合上、詳述できないが、このような効果をもつソーシャルメディアは、外国語の学習・教育の分野で今後ますます活用されることが期待される。しかし一方で、このような学習を実際に行う際には、課題として、目標設定、継続性、コミュニティへの所属感、学習・認知プロセス支援などをどうするか、フォーマルな教育システムにいかに取り入れるか、学習者の発言や行為をどのようにコントロールするか、評価をどうするか、といった数々の具体的な項目を丁寧に検討していく必要があるだろう。

デジタルコンテンツを用いて真に豊かな学びを実現するために、私たち教師は、今後もこのような細かな検討を重ねることを求められているのである。

⁴小松祐子、「ソーシャルメディアと外国語学習・教育—フランス語の新しい学びのために—」、『関西フランス語教育研究会論文集 RENCONTRES』第25号, 2011, p. 80.